

阿南ぶらりまち紀行～地域の輝き～

ふるさと「阿南市」のすばらしい魅力を再発見!

第96回



たくむじ
 工地協議会（那賀川町）

那賀川町工地の八幡神社から東に300米余り、海へ向かう道沿いに新四国霊場がある。新四国霊場とは、石仏を巡拝して実際に四国八十八ヶ所を回ったのと同じご利益を授かろうと作られたもの。工地では、昔から旧暦の3月21日（4月20日）の御正御影供と呼ばれる弘法大師の命日に地域住民が参拝に訪れ、遊山箱を囲んでお祭り騒ぎするのが習わしだった。しかし、時代とともに参拝者は減少。御正御影供への関心は薄れ、地域住民が寄り集まる場としての役割も失われた。

そんななか、長年、新四国霊場の管理を行う工地協議会の湯浅宗男さん（68歳）をはじめとする皆さんが立ち上がり、今年の四国霊場開創1200年の節目に合わせた参拝者へのお接待を企画した。周りの木々をきれいに整備するだけでなく、石仏を手作りの赤い前掛けで飾り付け、各札所には説明板や竹製の花立てを設置。御正御影供当日には、参拝者へ地元産の果物や飲み物を手渡すなど、心を込めたお接待に取り組んだ。



若い頃、祖父に連れられて御正御影供に参加したことがあるという会長の湯浅具展さん（68歳）は語る。

「あの頃、とても楽しそうだった参加者の横顔を今も覚えています。最近では地域行事や住人同士の絆も衰退しつつあり、少し寂しい。多くの人が集まって一緒に笑い合える場所をもう一度作りたい。そして、昔から続くこの御正御影供の行事をこれから先も続けていけたら」
 この日、新四国霊場を訪れたのは約70人。いつもは閑静な場所が活気と笑い声で満たされた。お接待する人とされる人の交流だけでなく、ご近所さんや旧友の間でも話に花が咲く。その風景は、かつてのにぎわいを取り戻していた。

木々が囲むならかな道を歩き、最後の札所にたどり着く。石仏の隣には真新しい札が添えられ、こう書かれていた。
 「お疲れ様でした」

この言葉には、一度きりで「終わり」でなくこの先何度でも歩いてほしいという、工地協議会の願いが込められている。

